

浜之郷小だより

学校教育目標 ～支えあう・聴きあう・学びあう～

子どもたちが自分を再発見し、友だちを再発見し、学ぶことの価値と意味を再発見して「人生最高の6年間」を生み出す学校、そして、その営みを通して教師も親もともに育ちあう学びの共同体としての学校でありたい。

始業式・入学式から早くも約一か月が経ちました。4月22日（火）に1年生の交通安全教室（歩行）が行われました。入学したての1年生が、市役所の安全対策課、交通指導員、警察、推進協、交通安全母の会など多くの皆様のご協力を得ながら校庭にラインパウダーで描いた模擬道路を歩く練習をしました。

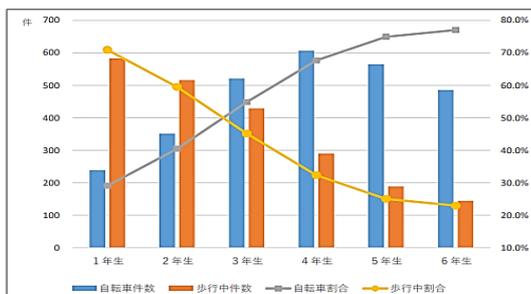


この1年生で歩行訓練

を実施することにもちゃんとした理由があります。左のグラフを見てください。ここからわかる通り、7歳での事故が未成年の中では突出しています。つまり、1・2年生の事故が歩行者事故では一番多いということがわかります。また、下のグラフからは「歩行中の事故の割合は学年が上がるにつれて低下する」「自転車の割合は学年が上がるにつれて上昇する」「3年生でそれが逆転する」ことなどがわかります。また、別資料によれば、月別の交通事故総数の最大は12月ですが、小学生は特徴的で4～6月が多いのだそうです。



過去5年間（H30～R4）の歩行中の交通事故による年齢別の死傷者数
(神奈川県警察 HP より)



H27年～R1までの5年間の交通事故発生件数（警視庁 HP より）

浜之郷小学校では、児童の登下校中の交通事故に対する安全を重要視して、多くの機関と連携しつつ3年生と5年生で自転車の安全教室を今後予

定しています。特に、5年生の訓練においては、5年生自身が日常利用している自転車をお借りして訓練をしていく予定です。詳細は後日お伝えいたしますが、保護者の方に学校までもってきていただく予定です。ご家庭の協力をお願いいたします。また、登下校での黄色い帽子の着用もお願いします（黄色い帽子は萩園の「第一カッター興業」様より市内の全ての1年生に寄贈されたものです）。事故に遭ってうれしい人は誰もいませんから。

小学生が登下校時にかかる黄色い帽子は、今では交通安全のシンボルとしてなじみです。和歌山西署の交通課係長・坂下敏郎は「子どもの事故は大人の責任で防がなければ」と一念発起して交通事故減少を目指します。そして偶然のひらめきで、黄色い帽子が誕生します。

日本は高度経済成長で、人々の暮らしに大きな変化が表れた1960年代。自動車の急速な普及で死亡事故が急増し、「交通戦争」と呼ばれました。体の小さな子どもは、車のサイドミラーやピラーなどの死角に簡単に入り込んでしまいます。そこで、坂下は小学生の身長でも体の一番上に位置する頭部に、目立つ色の帽子をかぶせる事でドライバーにも目に入りやすく、遠くからでも見つけやすいという理由から和歌山西署にアイデアを提案して、採用されました。

坂下は、着用する帽子の色「赤、黄、青、緑」について300m離れた所からの視認性や時間帯、天候などを考慮して、のべ1万人にも及び子供たちの協力を得て日々実験を繰り返しました。結果、黄色が一番目立つ色という結論に。1960年4月に和歌山西署は管内の小学生や園児に黄色い帽子の着用を呼びかけた結果、子供（15歳以下）の交通事故死者数は減少していきました。

和歌山市の和歌山県警察学校の資料室の一角に、池田勇人首相（1962年当時）名の表彰状と黄色い帽子が飾られています。1962年7月の「国民安全の日」に、和歌山西署交通課係長の坂下敏郎（故人）の交通安全に寄与した功績をたたえて贈られました。県警によると、現職の警察官が内閣総理大臣表彰を受けるのは異例だそうです。

「47都道府県話のネタ辞典」【和歌山県】黄色い通学帽の発祥の地と誕生秘話 <https://birth-place.com/yellow-school-cap/> より抜粋